ナチ強制移送者像に見る歴史、証言、小説の入り組み

――オルガ・ヴォルムセル＝ミゴ
『連合軍が収容所の扉を開いたとき』（1965）を巡って

有　田　英　也

はじめに

本論は、収容所体験が帰還者と帰還受け入れ者の対話を通じてどのように言語化されるかを、あるフランス語書籍をもとに考察する。オルガ・ヴォルムセル＝ミゴ（1912–2002）はナチ強制収容所の被拘留者の追跡調査と帰還受け入れをフランス政府機関で行った。そして、帰還者の証言と自身の回想を、1944 年 8 月から 1945 年 5 月まで時系列にならべ、著者自身の博士号請求論文も活かして歴史的経緯を解説し、『連合軍が収容所の扉を開いたとき』[1] を 1960 年代半ばに出版した。1985 年の改訂版には自著序文も付されている。ヴォルムセル＝ミゴ旧姓ジュンジェルソン（Jungelson）はユダヤ系フランス人で、帝政ロシアからの亡命者を両親としてナンシーに生まれた。後述するレオン・ポリアコフとともに、強制移送の歴史叙述における先駆者である。本論では、強制収容とホロコーストの記録が、歴史、証言、小説（広くはフィクション）といった物語のジャンルの相互干渉のなかでどのように読まれうるかを考えることになるが、それは本論の筆者がフランス 1930・1940 年代の文学を研究していることと無縁ではない[2]。

ジャンルの問題

強制収容とホロコーストの経験が言語化されるさいに、それを記録として世に送り出すか、それともフィクションに仕上げるかは本質的な問題である。なぜなら、ともに過去の再現を試みるとはいえ、証言とフィクションの折り合いは悪く、前者の真正性を後者の遊戯性が傷つけるからである。また、史料批判を旨とする歴史は、生存者の証言に対してさえ職業的疑いの目を向け

るであろう。まして歴史家たるもの過去の再現にあたってフィクションもどきの叙法は退けるだろう。

もし『アンネの日記』を日本の読者に紹介するにあたって、「収容所もの」「ホロコーストもの」などの下位ジャンルを立て、さらに空前絶後と煽るとすれば、それは販促という行為それ自体の戯画となる。強制収容とホロコーストの経験に対する愚弄とさえ感じられるだろう。その一方で、自叙伝や一族の歴史では、歴史叙述と証言と小説の境界が入り組む傾向にあるから、生還者の著作物の翻訳出版には慎重さが求められる[(3)]。

それでは、個人的事象と歴史的事象を往還しながら自身あるいは一族の肖像を描く書き手にとって、ジャンルはどう捉えられるのだろうか。3 人のユダヤ系作家が 1970 年代以降に発表した著作を例に取ろう。

ジョルジュ・ペレック『W あるいは幼年時代の思い出』（1975）は、W という土地をめぐる冒険小説風の物語と、ポーランド移民の両親のもとでパリに生まれた自身の来歴の物語を交互に並べた技巧的な自伝である。幼い頃に見たヘブライ語字母と思われる印を想起するくだりには、長い注記がされ、そこに「この思い出あるいは偽物の思い出」（p. 25）という言葉が読める。記憶を史料批判する語り手が、「歴史」の語り口を模倣するのである[(4)]。

また、哲学者エドガー・モランは、テッサロニキ出身の父親の事績を『ヴィダル』（1989）[(5)] で語るにあたって、歴史学者である娘と言語学者に協力を乞うた。語り手はパリのユダヤ系服飾業界をリアリズム小説のように描き出すとともに、ギリシアからフランス、ベルギー、イタリアに分岐した一族がそれぞれの土地で直面したホロコーストの諸相を伝える。モラン自身は南フランスで抗独レジスタンスの一員だった。

そして、米国在住のフランス文学研究者で伝記作家のミシェル・サルドは、

小説（roman）と銘打った『沈黙から戻る　ジェニーの物語』（2016）で、やはりテッサロニキにルーツを持つ実母からの聞き取りを核に、一族の事績を語った。巻末には今後の執筆計画が述べられている[6]。

ペレック以下の 3 作は、いずれもユダヤ系フランス人のホロコースト体験、少なくとも第二次世界大戦中にユダヤ人を襲った災厄を物語っている。その結果、一族の事績を通じて、民族なり国民なりの歴史に新たな光があたる[7]。ただし、これらの作品は、強制収容を直接体験していない作者による遡行的叙述であり、物語の内容、少なくともその一部は親世代の事績の調査である。

逆に、ナチ強制収容所からの帰還者が、最初は回想記や証言を公にしたものの、かけがえのない自分自身の経験を、想像力に委ねて語りなおすこともある。その理由が、ブーヘンヴァルト収容所から帰還した元政治犯ホルヘ・センプルンの 1994 年の著作『書くか、それとも生きるか』に見いだされる。「よく制御された物語の技法のみが、証言の真実をいくらかなりと伝達しおおせるだろう」[8]。

たしかに、センプルンは職業作家であり、自身の政治信条も含めて言うべきことを多々持っていた。だが、「普通の」生還者も、直視しがたい出来事について、自己の体験を「証言」するにあたって、聞き手を意識することで、そこに「歴史」的脈絡をつけ、読みなれた「小説」の書きぶりを批判的に参照したり、あるいは物語の技法に身を任せたりしながら話すことはある。オルガ・ヴォルムセル＝ミゴ『連合軍が収容所の扉を開いたとき』に収められた数多くの断片的証言から、話の真正性と虚構性のあいだの揺らぎが読み取れる。第 2 次世界大戦終結 20 周年のタイミングで発表された同書の、1985 年増補版に即して、強制収容とホロコーストの記憶を歴史的に問い直す方法について考察してみたい。

強制収容とホロコーストの記憶

ミゴは『連合軍が収容所の扉を開いたとき』の「序論」で、「本書は執筆中の博士号請求論文の一章をなす歴史叙述ではまったくなく、1944 年 8 月から 1945 年 5 月にかけて、日々発見された強制収容所の現実にすぎない」(p. 18) と述べる。書き手に発見を促したのは、占領地の刑務所やナチ強制収容所に残された被拘留者台帳であり、移送記録であり、墓所であり、巷間の噂話やラジオ放送、そして少数の生還者の証言に他ならない。だが戦後フランスでは証言、フィクション（特に小説)、そして歴史叙述の対抗関係のもとに、強制移送とホロコーストのイメージが描かれていた。

本論では、オルガ・ヴォルムセル＝ミゴの著書が公刊された 1965 年を位置づけるために、ミゴ自身が叙述の終わり近くになってナチによる強制収容およびジェノサイドのイメージの変遷を略述した箇所を紹介して解説し、次に現代史家による時代区分を参照して検討しよう。

ミゴは「結論に代えて」で、移送者追跡を始めてからの 20 年を振り返り、移送者像の変遷について苦々しく語っている[(9)]。「国際法廷、国際法、国際的語彙が設立され」大掛かりで鳴り物入りの裁判が開かれたが、「民衆が強制収容所の規模を真に自覚するよう導いたというより、詭弁家の悪意ある解釈を刺激するものだった」。だが、ナチ高官と、彼らに協力した医師と実業家が裁かれ、占領地の収容所責任者が「四大国の庇護のもと」裁かれると、「人々は学ぶ必要がなくなり、どうやら恐怖は飽和点に達した」(p. 311)。

ここでミゴが語っているのは、アウシュヴィッツ解放（1945 年 1 月 27 日）とドイツの無条件降伏（1945 年 5 月 8 日）に始まり、フランスの対独協力者裁判（ペタン、ラヴァル、モーラス)、ニュルンベルク裁判を経て、第二次世

界大戦終結 10 周年に至る、戦後 10 年間の空気である。「飽和点に達し」て人々が慣れてしまった像に、ふたつの映像が新たな光をあてた。まず、1956 年にドキュメンタリー短編映画『夜と霧』（32 分）が公開された。監督はアラン・レネ、脚本はマウトハウゼン収容所生還者ジャン・ケーロール他である。ケーロールの「連合軍が収容所の扉を開いたとき」という言葉を、ミゴは 1965 年初版のタイトルとし、これに「移送の悲劇の最終幕」と副題を付した。初版には世論の「飽和点」を押し上げて、移送者の悲劇を直視させる実践的意図があった。

これに反して、1985 年の再版が「移送者の帰還」をタイトルに掲げて、原著タイトルの「連合軍が収容所の扉を開いたとき」を副題にしたのは、アネット・ヴィーヴィオルカがその主著『移送とジェノサイド　記憶と忘却のあいだ』（1992）で指摘するように、戦時捕虜、レジスタンスや共産党員などの政治犯、ユダヤ人移送者、さらに強制労働奉仕（S.T.O.）の志願者まで一括りにしたかの印象を与えるので適切でない。また、ヴィーヴィオルカはミゴ自身が「人種」的理由による移送者と「政治」犯を混同していると批判した[(10)]。

次に、「飽和点」を押し上げたのは、よく知られた映像である。南米に潜伏していた IV 局（ゲシュタポ）B4 課（ユダヤ人課）のボスで SS 中佐のアドルフ・アイヒマンがイスラエルの諜報機関によって捕縛され、エルサレムで 1961 年 4 月から 12 月にかけて裁判にかけられた模様を、米国のテレビ局が配信した。

ミゴによれば、世界中のジャーナリストがイスラエルに赴き、「ガラスの檻」で守られた被告を見た。だが、「数年前には採算が取れなかった代物だ」（p. 311）。アイヒマンは、「おそらく最期まで助かるつもりでいた。それほど

までに彼の眼に〈最終解決〉の過程は論理的で完璧だった。それほどまでに、ジェノサイドの生存者と、生存者の数を増やすために何もしなかった世界全体とのあいだの、長きにわたる憎しみを晴らす贖罪の山羊のつもりだったのだ」(p. 311)。

命令に従ったにすぎないと弁明に終始したアイヒマンに対して、アーレントの使った「凡庸な悪」[11] という語句は有名である。アーレントが女性、子どもを含む数百万のユダヤ人の強制移送に主導的な役割を果たした元親衛隊中佐を、凡庸な人物として描き、エルサレムの法廷とそのメディア化を揶揄したとして米国のユダヤ人から非難されたことも知られている。これに対してミゴは、アイヒマンが凡庸かどうかはともかく、法廷の被告が「贖罪の山羊」気取りだったことに立腹している。ミゴの憤慨を理解するために、その後の経緯を『連合軍が収容所の扉を開いたとき』に読もう。

移送と虐殺の責任者の裁判が終わると、世界は凡庸な実行犯を裁こうと躍起になった。1964 年の冬からフランクフルトの裁判所で、ふたりの元親衛隊員の犯罪が審理された。彼らはブーヘンヴァルトで処刑担当のゾンダーコマンド（作業班）第 99 隊所属だったが、戦後は「平時の職業に復帰していた。まったく良心に恥じることなく、一人はなんと小学校教員、もう一人は銀行員である。彼らは実行者にすぎなかった」。この裁判は狙い通りの効果を挙げた。「無知きわまる反応」がそれである。ミゴは反応を口真似する。「アウシュヴィッツでは子供を殺していたのか？アウシュヴィッツではガス殺があったのか？なんというひどいことを！」(pp. 311–312)。ミゴはこのような感情を公衆のものと想定したうえで、それを偽善的と考える。

ミゴによれば、ドイツ国民は、「舞台化された『アンネの日記』が心優しい反ユダヤ主義者さえも涙ぐませたように」、自分も加害者になっていたかもし

れないとは露も思わず、「なんというひどいことを！」と怒りの涙を流した。かつての死刑執行人は犠牲者よりたやすく元の職業に戻れるが、「犠牲者のほとんどは死んでしまったから、憤るわけにはゆかない」（p. 312）。

ここでミゴは当事者性の問題を提起している。自分が命令を実行した結果、数百万のユダヤ人が生命を断たれたことへの想像力を欠くアイヒマンも、他人事のように凡庸な実行者に憤るフランクフルト裁判の聴衆も、ナチ強制収容所システムとホロコーストに対する当事者意識を持っていない。

ミゴによる 1965 年までの戦後史は、おぞましさの飽和、急激なメディア化、カタルシスの 3 段階に区分されよう。だから今こそ死者に語らせるべきなのである。こうして、『連合軍が収容所の扉を開いたとき』という、元移送者の証言と追跡・受け入れ担当者の回想、そして歴史的文脈の解説およびナチ強制収容所システムの考察を含むハイブリッドな著作が、戦後 20 年の節目の 1965 年を期して執筆された。ミゴの著作より 20 年も後の 1980 年代以降にフランスで行われたポール・トゥーヴィエ、モーリス・パポンなどユダヤ人迫害実行犯の裁判では、直接の被害者は証人として法廷に呼ばれても当時の記憶を蘇らせるのに苦労したという。ミゴの著書がベルギーで再版された 1985 年はこの時期にあたる。だから、戦後 20 年の時点で、証言とそのコンテクストを、一般向けの読み物にまとめたミゴの仕事は貴重だった。

ただ、残念なことに、1968 年に発表されたミゴの博士論文が、ドイツ本国の収容所におけるガス室の有無に関する間違いのせいで、元被収容者団体から激しいバッシングを受け、この本もパイオニアとしての功績を大幅に減じることになった[(12)]。

アンリ・ルッソの時代区分

それでは、現在、占領およびヴィシー政権時代に関わるフランス人の記憶について、もっとも信頼されている二人の歴史家、アンリ・ルッソとアネット・ヴィーヴィオルカに即して、ホロコースト像の時期区分を検討しよう。

アンリ・ルッソは第二次世界大戦中のヴィシー対独協力政権のイメージを論じた著書『ヴィシー・シンドローム』(13) で、1980 年代半ばまでの期間について、次のような時代区分を提出した。この区分法は、対独協力像の決定的な転換をもたらしたパクストンの『ヴィシーのフランス』(14) に依拠しているが、パクストンが政界、官界、財界、大衆運動など対独協力の制度的支柱を、戦況と占領の推移に応じて記述したのとは異なり、ルッソは戦後のヴィシー像の変遷を、歴史叙述、映画、小説に注目し、心理学用語を使って描き出した。

ルッソによれば、フランス人にとって第二次世界大戦の記憶は、まず戦争と強制移送の死者を弔おうとして果たせない「未完の服喪」（Le deuil inachevé）の 10 年を通過する。

次いで、ヴィシー時代とホロコーストの記憶は 1970 年代の初めまで、見ようと思えば見えるが、あえて見なければ見えないという意味で意識化に「抑圧」（Les refoulements）された。

ルッソによれば、転機はミゴが挙げるアイヒマン裁判ではなく、映画や小説がタブーを犯して占領下の事件や人物を取り上げたことで生じ、こうして 1970 年代前半の「壊れた鏡像」（Le miroir brisé）期が始まる。さらに 1974 年からは、ヴィシー像が亡霊のように現在につきまとう「強迫観念」（L’obsession）が始まった。ホロコーストのメディア化という点で言うなら、その年に製作が

始まったランズマンの映画『ショア』が 1985 年に完成するまでの間に、ルイ・マル監督の映画『ルシアンの青春』が 1975 年に公開されて話題になり、アメリカのテレビドラマ『ホロコースト』が 1978 年に放映されて人気を博している。ヴィシー時代と強制収容の記憶は、実話とフィクションの境を曖昧にして消費されたのである。

このように、ルッソはフランス社会のアイデンティティ・クライシスとしてヴィシー像の変遷を描いている。その時代区分に照らせば、ミゴの著作は「未完の服喪」期の、それも 1944 年夏から 1945 年半ばまでの出来事を記して、「抑圧」期の世論に問うたことになる。

移送者像の確定

だが、ミゴの著作が対象とするナチ強制収容所への移送者像を確定するには、ヴィシー政権と対独協力者のイメージだけでは足らない。移送者という言葉の複雑さを、歴史的文脈と合わせて理解しなくてはならない。ヴィーヴィオルカは主著『移送とジェノサイド　記憶と忘却のあいだ』（1992）で、主として第二次世界大戦末期から戦後まもなくの 1948 年までのフランスにおける移送者像を論じた。時代区分としては同じ歴史家の後述する小冊子と講演集が参考になるが、主著はまさしくミゴが主題とした移送者追跡と受け入れを扱っている。

ヴィーヴィオルカは歴史叙述における記憶と証言の関係に配慮しながら、移送者探索・受け入れ制度、帰還者の証言、ユダヤ人コミュニティーの反応の 3 点について詳述する。3 点の記述は三部構成の博士号請求論文の構成に反映している。移送者探索と帰国受け入れを管掌した省庁の成立から、レジ

スタンス諸団体との競合を経て廃止されるまでを記述する第 1 部が「制度」にあたる。次に、主としてレジスタンス闘士ら「政治犯」からなる帰還者の新聞・雑誌での発言や彼らの著書も含めた言説を、テーマごとに検討する第 2 部が「証言」にあたる。最後に、第 3 部は、ジェノサイドの惨状に直面したユダヤ人コミュニティーの反応を論じる。ヴィーヴィオルカが「制度」の記述を 1948 年で区切ったのは、その時点で「移送者がある種の地位を得て、彼らの証言の波がとりあえず収まり、ユダヤ人コミュニティーがおおむね再建を果たした」からである。ただし、制度面ではたしかに 1948 年までだが、証言とユダヤ人コミュニティーの反応については、1960 年代・1970 年代に生じた変化も記述される[15]。

表題で移送とジェノサイドをつなぐ「と」は、戦争末期から戦後初期にかけてのフランスで、移送者とは誰かという問題が必ずしも自明ではないからこそ、著者が「総序」で言うとおり肝要である。

ナチ占領下のフランス公権力から見た「移送者」とは、政治犯、レジスタンス、人質が主で、戦争捕虜とは異なる。だが、彼らはすべて自由フランス政府が奪還すべき対象だった。だから追跡調査を任とする政府機関、その名も「捕虜・移送者委員会」（commissariat aux Prisonniers et aux Déportés）が 1943 年 11 月 18 日にアルジェで設置され、レジスタンス運動「コンバ」の創設者アンリ・フレネが責任者となった。同年 12 月 8 日には、捕虜と移送者に加えて、占領軍とヴィシー政府の取り決め（労働交代制、次いで強制労働奉仕［S.T.O.］）のもとでドイツに渡った労働者も対象に加えられ、フレネを大臣とする捕虜・移送者・避難民省（M.P.D.R.）が成立した。強制労働奉仕とは、ドイツの苦戦に伴い、徴兵年齢の青年をドイツに労働者として派遣した制度だが、やがてその多くは行方不明になり、マキ（武装レジスタンス）に

合流しさえした。さらに、1944 年 8 月末のパリ蜂起、解放の直前の 8 月 18 日に、フランソワ・ミッテランが共和国臨時政府の捕虜・移送者担当臨時補佐官に任命され、国防省が戦時捕虜と強制労働奉仕による出国者を管轄することになった。だが、戦後もフレネの「省」が引き続き移送者の追跡と帰国受け入れを担当した[16]。

一方、フランスで検挙されてドイツ東方占領地に強制移送されたユダヤ人も「移送者」のはずだが、その実態解明については公的機関の対応が大きく遅れた。ヴィシー政権の対独協力の罪状にユダヤ人迫害への国家的加担が含まれるとは十分に理解されなかったためである。ユダヤ人移送者、行方不明者の追跡調査は現代ユダヤ資料センターなどユダヤ人団体に委ねられていた[17]。

このように、戦争末期から戦後すぐのフランスでは強制「移送」とユダヤ人の「ジェノサイド」が区別して論じられた。これは 1970 年代末から 1980 年代にかけてジェノサイドに関する証言が欧米で盛んになり、フランスの第二次世界大戦の記憶をめぐる議論を席捲することを思えば隔世の感がある。だが、政治犯は、実際に収容所でユダヤ人被拘留者と出会っていた[18]。ラウル・ヒルバーグの研究書『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』（1961）の影響が限られていたと考えれば、ジェノサイドの全過程において「移送」段階の果たした役割は、アイヒマンの裁判によって 1960 年代初めに世界に知られたことになる。

たしかに、移送者のうち過酷な条件で生き延びた帰還者を受け入れた諸機関には、捕虜、労働者、政治犯、そして人種差別による移送者の 4 者が集まり、それぞれに調書が作られ、支援金を含む対応がなされてはいた。しかし、「人種差別による移送者」のうち、ユダヤ系フランス人に外国籍およびフラン

ス国籍を剥奪された者を含めたユダヤ人移送者の生存率は極端に低かったから、移送者の帰還の波に紛れてしまった。例外的にミゴ（当時はジュンジェルソン嬢）は、オルセー駅とリュッテシアホテルで受け入れと調査の最前線にいたので、現場の混乱と幻滅を著書『連合軍が収容所の扉を開いたとき』に、自分の見聞を一人称で「証言」できた。ヴィーヴィオルカが「と」で連結した「移送」と「ジェノサイド」という二つの事象の奥行を、ミゴは 1945 年 4 月末から 5 月にかけての「移送者の帰還」期に徐々に理解しつつあったのである。

アネット・ヴィーヴィオルカの時代区分

移送「と」ジェノサイドは、半世紀の広がりのなかで、フランス人の記憶にどう刻まれているのだろうか。

小冊子ながらアネット・ヴィーヴィオルカの『証言の時代』[19] は、パリ解放 10 周年記念行事やドキュメンタリー映画、さらにアイヒマン裁判のテレビ中継を取り上げて、ホロコースト像の形成と変容における証言とフィクションの関係を時系列で論じる。メディアへの注目はルッソの政治文化論に通じるが、ヴィーヴィオルカの区分は、証言という表現およびメディア行為についての時代意識を掘り下げている。メディア行為と言うのは、先にミゴの 3 段階の時代区分で見たように、もうたくさんだ（飽和点）と出版を危ぶむことにも、アイヒマン裁判を報道しテレビ中継することにも、メディアの力学が働くからである。1945 年以後は、順に「水没した世界を証言する」「証言の戴冠」「証言の時代」に区分される。以下、この時代区分に即して、ミゴの著作との関連を探ろう。

ヴィーヴィオルカによる最初期の「水没した世界」は、ワルシャワゲットーでのロシア東欧系ユダヤ人共同体の歴史叙述の試みから、1961年のアイヒマン裁判の手前までの約20年を対象としており、ミゴの著書との関りがもっとも大きい。戦後、ロシア東欧のイーディッシュ語圏ユダヤ人社会が「水没」したのは、これらの地域が戦後の東西対立における東側になり、戦時下・ナチ占領下の収容所や、帰郷したユダヤ人をポーランド人が襲った「キェルツェの虐殺」（1946年7月）などの実情がよく分からないからである[20]。また、前述のようにナチ戦犯の裁判でユダヤ人犠牲者に関する証言は前景化せず、まさに「水没」していることもある。

フランスのペタン裁判など対独協力者裁判では、ヴィシー政権の戦争責任が問われたから、ラヴァル元首相とペタン元帥が、ドイツの戦争継続に加担したかどうかが審理された。それゆえ、ホロコーストへの国家としての加担は問題とされないばかりか、ラヴァルは交渉の結果、フランス人労働者とユダヤ人の移送を人数の点で抑制したと弁護されている[21]。ヴィシー政権によってフランス国籍を剥奪され、占領ナチ当局に引き渡されたユダヤ系フランス人に、少なからずロシア・東欧出身者がいたであろうことを思えば、戦後の世論において同地の災禍が物心両面で「水没」していたと言えよう。

なお、ミゴはヴィシー政権の反ユダヤ政令（1940年10月31日）によってコレージュの歴史教員の職を奪われた。だが、フランス革命史のピエール・カロンが1940年に国立古文書館に開いた戦時捕虜研究課に資料係として採用され（pp. 76–77）、それが1944年9月から捕虜・移送者・避難民省で働き始める下地となった、とミゴは初版の序論に記している（p. 12）。

1945年のニュルンベルク裁判では、政策立案者と軍指導者を法理にもとづいて裁いたため、文書の記録に比して証言の比重は小さく、フランスに関し

てはレジスタンス闘士の収容所生還者によるものだけだった[22]。

例外的にユダヤ系生存者の証言をまとめて公にできたフランス人が二人いる。捕虜・移送者・避難民省のミゴは、戦後も 1946 年にマイダネク収容所で現地調査し、1955 年には歴史家アンリ・ミシェルとともにパリ市主催のパリ解放 10 周年記念行事で歴史顧問を務めた。もう一人は現代ユダヤ資料センターを代表してニュルンベルク裁判に赴き、後に一連の著作によって反ユダヤ主義史の第一人者となるレオン・ポリアコフである[23]。

ヴィーヴィオルカによれば、すでに 1946 年からナチ強制収容所に関する証言は飽和状態と感じられ、生還者の原稿に出版社が見つからない状態だったのは、収容所生還者の語りを聴くまいと周囲が抵抗したからである[24]。

ところが、1961 年にイスラエルのエルサレムで行われたアイヒマン裁判を契機に、ホロコースト被害者と遺族の記憶が「水没」から救い出され、証言者の地位は一変して、ヴィーヴィオルカの言葉で「証言の戴冠」を迎える。ミゴの 1965 年の著書は、その波に乗って大手のロベール・ラフォン社から出版された。

そして、ルッソも注目したようにホロコースト・フィクションが流行する。前述のアメリカのテレビドラマ「ホロコースト」（1978）は、1979 年にフランスで、日本でもテレビ朝日系で配信され、製作に 11 年を要したクロード・ランズマンのドキュメンタリー映画『ショア』は 1985 年に上映された。現代に至る「証言の時代」の到来である。

ショア記憶財団で行った講演（2008）を読むかぎり、ヴィーヴィオルカは「証言の時代」を無批判に肯定していない。アイヒマン裁判の 38 年後に公開された映画『スペシャリスト』（1999 年）のカメラワークを精緻に分析し、スピルバーグがドキュメンタリー映像と実写を組み合わせた劇映画『シンドラー

のリスト』（1993）によってホロコーストの実像を描き出そうとしたのとは対照的に、共同で脚本と監督を務めたロニー・ブローマンとエイアル・シヴァンが、法廷映像を恣意的に編集して真実らしく見せたと結論づける[25]。フィクションがみずからを歴史叙述に偽装して史料を用いるのをヴィーヴィオルカは許さない。

前述のルッソの『ヴィシー・シンドローム』第2版（1990）とヴィーヴィオルカの証言論は、1995年に始まる第二次世界大戦終結50周年記念行事と、歴史修正主義の台頭に先行している。だが、ルッソが歴史家としての務めを理由に、多分に政治ショーの趣のある協力者裁判への出廷を拒んだように、ヴィーヴィオルカも1995年以降を分析する枠組みの提示を慎重に避けている。もっとも、ルッソは2001年に発表した浩瀚なヴィシー論の最終章で、1990年代の対独協力者裁判で証言した著名な歴史家の名を挙げて、「歴史家は過去を裁くのか」と自問している[26]。

次章「連合軍が収容所の扉を開いたとき」ではミゴの著書を、その時系列叙述にほぼ従いながら、5つの項目を立てて論じる。その巻末に付された人名索引に若干の誤記があるものの、強制収容所に関する証言と歴史叙述の集積は、タグとインデックスが施されたアーカイブとなっており、その随所に著者の考察が加えられている。いわばミゴによる編集と考察は、「作品」としての個々の証言に対してカンバスや額縁のような支持体をなすとともに、ミゴ自身の記述も「作品」の一部として読めるわけである。

連合軍が収容所の扉を開いたとき

(1) 国土解放と行方不明者の探索

ミゴの回想は1944年6月6日、連合軍のノルマンディー上陸に始まり、次々と収容所が解放されてゆく日々を、夏秋冬春と季節を追って叙述する。だが、最初のうち帰還者の証言は現れない。8月は「最終移送の月」(p. 23)に外ならず、パリ解放が始まった8月20日には、視野がベルリン北郊に転じる。

> 「18か月前にアウシュヴィッツに到着した230人の女性のうち生存者はわずか49人になり、ラーヴェンスブリュックに移送された。たぶんフェルナン・グルニエがロンドンからラジオで移送者の惨状を伝えたので、英仏海峡の彼方ではアウシュヴィッツほど不評でない収容所に退避させたのだろう」(pp. 23-24)。

ここで語られる「女性」たちは、レジスタンスに加わって逮捕され、政治犯として例外的に、「絶滅収容所」のアウシュヴィッツに1943年1月に移送された。一般的に政治犯はドイツ本国のブーヘンヴァルトか女子収容所のラーヴェンスブリュックに送られた。「退避」とはロシア軍の反転攻勢を受けて、収容所を管理していたナチ親衛隊と警察が、被拘留者を西に移送したことを指す。後に女囚のひとりシャルロット・デルボーが収容所での生と戦後の生を、『1月24日の移送列車』(1965)と『アウシュヴィッツとその後』三部作(1970-1971)で物語っている。デルボーによれば、彼女ら8名の女囚は、本人たちが唖然としたことに列車の客室に座席を与えられ、ベルリン経由で次

の収容所と労働キャンプ（コマンド）に移されたが[27]、戦争末期には徒歩で「退避」させられ、歩けなくなると警備のSSから銃撃される「死の行進」が始まる。もちろん、ミゴは本をまとめる時点でそれらのことを知っているが、あえてパリ解放の歓喜に移送者の生存率の報を重ねてみせた。

この本でたびたび登場する女性レジスタンス闘士ドリーヌ＝ファニーは[28]、パリ解放の夜を警視庁で明かした（p. 24）。政治犯の書類を廃棄や焼失から守るためである。こうして移送者探索が始まった。

> 「［1944年］9月12日、忘れられそうもない日。フォッシュ大通りの捕虜・移送者・避難民省の、物騒な使われ方などされていないバスタブが不安を掻き立てる、そんな豪華で汚れた広い浴室で、私は移送関連書類に首っ引きになり始める。かりそめと思った仕事は、20年後の今も未完成だ」（p. 42）。

接収された事務所では、ごく最近までゲシュタポとフランス人協力者が、逮捕したレジスタンス容疑者を拷問していたと噂された。この浴室では水責めはなかった、と頭で納得しても寒気がするのだろう。

秋も深まり、フランス各地の収容所が解放されると、「省には死体置き場と墓所から収穫が届く」。事務所に通っていた移送者家族は、遺体が見つかれば、別の収容所での生存という望みが絶たれる。「あんたがたは情報源にいて幸運ですな！」（p. 55）という嫌味が職員を刺す。だが、ミゴたちは情報源をつかむどころか、まだ収容所の実態を知らない。「アウシュヴィッツでゾンダーコマンド（作業班）の反乱が起きたと知るのに数か月を要するだろう」。いや、「コマンド（kommando）という言葉に潜む汲みつくしがたい意味の片

鱗も知らなかったのだ」（p. 55）。

ここでコマンドとは労働キャンプのことである。ジュネーヴ条約により戦時捕虜を労務にあてられないドイツ軍は、長引く戦争で労働者不足の軍需工場に強制収容所の政治犯をあてがい、ヴィシー政府には捕虜と交換でフランス人労働者を派遣させた。コマンドは労働者に繰り入れられた囚人を管轄する中核収容所（Stamlager, Stalag）から、タコ足か衛星のような形で配された。コマンドごとに食事や寝所など生活環境に差があり、生存率の多寡に反映した。

以下の挿話では、おのずと空間と時間が重層的に叙述される。

1945 年 1 月、ミゴは移送者の足跡を求めてノール＝パ＝ド＝カレー地方のリール近傍、ロス（Loos）刑務所に向かう。そこは 1940 年の休戦条約でベルギーのドイツ軍政司令部管轄地域とされ、ヴィシー政府の権限が及ばなかったから、解放されて初めて行方不明者の消息が分かるのである。刑務所からの最終移送は 4 か月前の 1944 年 9 月 1 日で、ドイツに退避させられた収監者 1250 名のうち生還者は 130 名だったという（p. 38）。

ミゴの叙述には、「私の人生は刑務記録をにらみ、看守と顔を突き合わせて過ぎたものらしい」（p. 108）と、かなり後の感想も挟まれる。また、ロンドンを空爆するロケット弾 V1 号の飛来にはホテル中の人々が怯えた、と調査時の出来事が回想されるとともに、「製造しているのが誰だか私たちが知っていたとしたら…」（p. 109）という一節から、ミゴらがまだドイツの秘密兵器工場（ドーラ）で使役された政治犯の証言を聞いていないことが分かる。

同様に、ドイツに併合されたアルザスにはストリュートフ収容所があり、「人々は土を掘り返して、毎日のように、そのおぞましさを新たにしていた」（p. 110）が、帳簿は死因を「赤痢、全身衰弱」だとして虐待を隠していた。

このストリュートフの惨状を、1945 年 1 月 22 日、『トリビューン・ドゥ・ジュネーヴ』紙が大きく取り上げた。

ところが、各地で収容所の実態が公になると、奇妙な客が事務所に現れた。

> 「アルジャントゥイユを出たことがないのにラワ＝リュスカで〈拷問された〉女性や、メッスで〈銃殺された〉女性たちが、新聞を読んで狂乱し、犠牲者になりすましたらしい。丁重にお引き取り願わねばならなかった」（p. 120）。

ルーマニアのガリシア地方のラワ＝リュスカは、脱走歴のある捕虜の懲罰収容所で、そこにソ連軍捕虜が加わった。「〈ラワ＝リュスカ出身者〉はこれから何年もの間、自分たちにレジスタンス移送者の資格を要求し、ラワの生活環境は〈古典的強制収容所〉に劣らず過酷だった、と主張する」（p. 123）のだから、そこから女性たちが生還するはずがないのである。

ここまでの叙述から分かるように、アウシュヴィッツが 1945 年 1 月 27 日にソ連軍によって解放された時点でなお、ミゴたち捕虜・移送者・避難民省の係員は、フランス国内の刑務所や収容所の収監者が行方不明のままである事実に翻弄されていた。序論に「私たちが生存者を発見できると期待していた数か月の雰囲気を再現してみようとした」（p. 15）と書かれているように、ミゴは読者にかつての自分たち係員と移送者家族らの気持ちを追体験させたいのである。

(2) 帰還者と受け入れ担当者

1945 年 2 月に、ミゴは「省からジュネーヴに派遣され、国際赤十字と追跡

調査のための議定書の下ごしらえをすることになった」(p. 141)。移送者情報の共有は朗報だが、一方でミゴは移送者の追跡と受け入れに早くも組織間対立を見出している。省庁の他、C.O.S.O.R.［Comité des Œuvres sociales des Organisations de Résistance レジスタンス団体民生委員会］、MNPGD［捕虜・移送者全国運動］の間には、「いまだ微笑ましかったがすでに競合の兆しが感じられた」(p. 140)。

その頃、オデッサ経由でアウシュヴィッツ生存者の帰還が始まった。帰還者と受け入れ機関の職員、ボランティアとの間には埋められない意識の溝がある。

> 「私たちのうちでもっとも美貌の同僚が、アウシュヴィッツの話をしてくれた P.H. の顔を見て、血色がいいわ、うまく切り抜けたのね、すぐに他のことを考えるでしょうね、と不用意に思った。すると、居合わせた証言者のひとりで、もはや親族は誰も見つかるまいと私たちも承知していた男性から、痛烈にやり返されて、彼女は地面に潜りたくなった。〈いかにもあんたらの言いそうなことだ、絹の布団で屁をこく他に何もしなかったあんたらの〉」(p. 145)。

ミゴたちは「移送者、捕虜、労働奉仕に応じた人々、志願兵、強制的に従軍させられた人々、避難時や爆撃下の行方不明者、銃殺に処せられた人々を追跡」していたが、自分の仕事ぶりが、「学芸員が強奪された芸術品を追うのと同じくらい執拗」(p. 168) だったと自嘲する。もちろん、国民は財貨ではない。だが、政府機関の調査員には法律で定められたことしか調べられない。その先まで行こうと「移送者調査局（Service de recherches des déportés)」が、

ミゴの他にエヴリーヌ・ガルニエとアンドレ・ジャコブによって設立された[29]。

帰還者が増えるにつれて調査業務は受け入れ業務と重なり始めた。以下はヴィーヴィオルカもルッソも引用する史料的価値の高い一節である[30]。

> 「どこで移送者を受け入れるべきか。オルセー駅を想定していた頃は生存者（survivants）の状態に思い至らなかった。書類が揃えば彼らは帰宅し、すぐに日常生活を始められる、と考えていた。だが、知っていたはずだ。知っておくべきだったのだ、アウシュヴィッツやブーヘンヴァルトから漏れ聞いた噂を。1945 年 1 月に解放されたアウシュヴィッツで難を逃れた人々が帰国する前から、新聞・雑誌、ソ連のラジオ放送が明らかにしていた新事実を」（p. 174）。

(3) 収容所の実態と組織の論理

知っていたはずの新事実とは何だろうか。ミゴの回想は時として捕虜・移送者・避難民省の内部事情を明かす。1944 年 1 月という早い時点でラーヴェンスブリュック女子収容所の実態が、ひとりの脱走者、それもフランスで脱走して保護された女性によって明かされていた。ミゴは「モンペリエで逮捕されたある女性レジスタンス」と書くだけで、その名を明らかにしていないが、「妊娠中にラーヴェンスブリュックに移送された後、1944 年 1 月に出産のためサンドニ収容所に戻った」彼女は、首尾よくレジスタンスの同志たちに連絡し、サンドニの助産婦の協力を得て脱走した後、友人たちに戦争末期まで匿われた。そして、「ラーヴェンスブリュックを、生と死の条件を、飢餓

を、殴打を、虱を、裸に剥かれることを、恐怖を、占領されたあらゆる国、あらゆる社会階層の出身者からなる、レジスタンス、愛国者、パルチザン、社会的不適合者、普通犯までいた女性たちすべてを非人間化する試みについて」話した（pp. 174-175）。

この証言をドリーヌ＝ファニーが録音して報告書を作成し、G.P.R.F.［フランス共和国臨時政府］、ジロー将軍のアルジェ政府、イギリス、ジュネーヴの国際赤十字に提出した。「収容所では殺戮が行われている。ナチが証拠隠滅を図ったらどうなるのか。収容所の解放を考えよ。収容所解放を準備せよ」とドリーヌは煽った。目的遂行のためにレジスタンス同志から志願者を選び、収容所ごとに2名の医師と、被拘留者の完全退去まで所内にとどまる数名の女性ソーシャルワーカーからなるチームの結成を希望した。さらに、衛生資材と医薬品、食糧を積んだ航空機を用意し、現地では証言と図面と写真の収集を求めた。報告書は情熱的なアピールで締めくくられていた。

> 「せめてこれだけは知ってほしい、ラーヴェンスブリュックの被拘留者3万人に限ってさえドイツ軍の過ちによって少なくとも毎日のべ8名から10名が死亡している。休戦条約の調印後は、最速かつもっとも確実な手段で彼らを救出に行かねば死者は数千人に及び、その責はただ我々のみにあるのだ」（p. 175）。

だが、連合国のいずれも解放特殊部隊を想定しなかった。フランス南部レジスタンスのメンバーとはいえ民間人女性ドリーヌが作成した報告を前にして、おそらく政府関係者は、「狂っている。迫害妄想。『責め苦の庭』に取りつかれたフランス女」（p. 176）などと言い合ったのだろう、とミゴは推測する[31]。

報告書は作戦に影響を与えられなかったが、ミゴたちのようにナチ強制収容所から帰還する生存者像に一定のイメージを持った人々は、レジスタンス組織および政界の上層部と通じた女性たちを頼りに、帰還者受け入れ活動を始める。連合国幹部は帰還者について想像力がなく、「陽気な男たちが歌いながら、国旗を頭上にはためかせて戻ってくるとでも期待していたのだろう」（p. 176）が、パリ解放後、F.F.I.［フランス国内軍］がセバストーポル大通りの建物を接収して、避難民や、大西洋の壁[32]で働かされた外国人労働者、さらにギリシアやユーゴスラビア国籍の年配の女性たちを迎え始めると、大通りを見るも哀れな人々が行進した。まさに難民である。受け入れの民生班が活動を始めたその日、一発の手りゅう弾が窓から投げ込まれた。

この班には、前述のドリーヌ＝ファニー、レジスタンス団体民生委員会のアニエス・ビドー[33]以外に、非公然の女性ソーシャルワーカー（婦人民生委員）がいた。彼女らは生命と自由を危険にさらして被収容者と家族の救援活動を立ち上げた。ミゴの語る婦人民生委員は、1944 年 8 月に民生部を立ち上げたベテランで、監獄を訪ね、列車で駆け回り、地方責任者の逮捕や隠れ家発覚の急報があれば、不案内な町を夜間、逃げまどわねばならなかった（pp. 176-177）。

(4) リュッテシア作戦

リュッテシアホテルが帰還者を受け入れる女性たちの活動拠点となり、ミゴはそれを「リュッテシア作戦」（p. 195）と名付けたが、ヴィーヴィオルカによれば当時の史料に記載がない[34]。そのためリュッテシアホテルでの受け入れの記述は、ミゴの書いた一人称小説のように読める。

これは後に詳述され、同じ一人称で見聞を記述していても、他の歴史史料

と研究書で確認できる戦争末期のベルゲン＝ベルゼン収容所への移送者救出の旅とは異なっている（pp. 272–288）。そちらのミッションに、ミゴは病気で同道できない友人アンドレ・ジャコブの身分証明書を携え、「ジャコブ嬢」と名乗って参加し、1944 年 5 月 3 日にパリを発った。また、筆者ミゴは、リューベック港で避難民を乗せた「キャップ・アルコナ」など民間船舶がイギリス空軍に攻撃されたことを、まず伝聞情報をもとに記述し（pp. 258–260）、その後、旅の途上で登場人物として知らされるのである。

> 「私たちを恐れるドイツ人の、子どもたちの顔を見つめる。ほんの数日前に、ノイエンガンメ収容所を退避した移送者の船がリューベック港で空爆されたことを、まだ私たちは知らない」（p. 276）。

本論では、おそらくミゴの戦争観と移送者像を大きく変えることになったベルゲン＝ベルゼン行には紙数の関係で触れず、リュッテシアホテルでの移送者受け入れに注目する。

リュッテシアホテルはパリ左岸で唯一の豪華ホテル（パラス）である。ナチ占領下はドイツ国防軍防諜情報部（Abwehr）がこのホテルを接収し、占領地の抵抗勢力の排除を任とした秘密野戦警察（Geheime Feld Polizei）長官アルブレヒト・オーベルクもここで執務していた。また、フランス人ゲシュタポとして悪名高いピエール・ボニーとアンリ・ラフォンも出入りした[35]。ミゴたちはフォッシュ大通りの事務所に続いて、ここでもレジスタンス弾圧で血塗られた場所を、行方不明者の探索と帰還者の受け入れの舞台とした。

1944 年 4 月初旬に始まるホテルでの受け入れの中心人物は、前述のアニエス・ビドーとドリーヌ、そして後にゲシュタポに急襲されるイジューのユダ

ヤ人救援施設を夫と世話したヤンカ・ズラタン（p. 195, 292）だった。ホテルのレストランでは帰還者をもてなした。担当はすべてボランティアで、彼らをビドーが仕切り、食糧調達と調理にズラタンがあたった。

レジスタンス民生部が 1944 年 10 月に本拠とした「アルトワ通りは、これら半ば公然の機関のひとつになったが、依然として地下活動の第一則、つまり機転を利かせて要領よく、の決まりで運営されていた。COSOR［レジスタンス団体民生委員会］、MLN［全国抵抗運動］、コンバのメンバーたちが糧食と衣類の調達で頼りにしたのは私たちだけだった」（p. 194）。

「4 月になって帰還者の物入りな大波が始まると、アルプス山地で療養施設として接収されたホテルが準備不足だと分かり始めた。当座の受け入れにオルセー駅は使い物にならない。駅は通過させるだけだから。息も絶え絶えに疲れきった人々には何よりもベッドが必要だ」（p. 194）。

4 年間もナチ占領下にあったフランスには、対独協力政府の吏員も、ファシストと呼びうる過激な協力者もいた。特にジョゼフ・ダルナン率いる民兵団（ミリス）は、ヴィシー政府公認の準警察組織で、レジスタンス掃討を行った[36]。

「帰還者の大波には〈毒麦〉も忍び込んでいる。民兵団の隊員、ゲシュタポのメンバー、密告者、志願労働者たちのことだ。彼らは 1000 フランの手当て、タバコ、衣類が目当てというより、帰還者書類に〈政治的移送者〉のお墨付きをもらえば旧悪の洗浄証明になると踏んでいたのだった」（pp. 194–195）。

実際、受け入れのボランティアには、「いたるところにレジスタンス闘士に化けた対独協力者を見がちな闘う天使」（p. 309）もいた。それゆえ、帰還者受け入れには、宿泊と介護ができ、さまざまな諜報員（D.G.E.R. や公安部や第 2 局）も配置できる広いロビーを備えた拠点を見つけねばならない。「私たち自身がさまざまな取り調べ部隊のあいだで迷子になっているのに、来訪者はどうなってしまうのだろうか」（p. 195）とミゴが気を揉むのも道理である。

職員売店の物資はビスケット缶など心細いかぎりだったが、完ぺきな許可証を携えた彼女らが、警察車両で闇市の押収物資保管所を回れば、ホテルの貯蔵庫は物資でいっぱいになった。ヴィーヴィオルカが当時の報道からリュッテシアホテルの美食とワインを称える記事を引いている。だが、そうした食材は押し寄せる人々の健康状態ではむしろ不適切だった。だから、「赤痢患者と回復期のチフス患者ためのミルク粥に役立つ」（p. 195）貴重な物資を、ひょっこり現れたカナダ大使夫妻が航空便で届けてくれたのは僥倖だったのである。

この「パリ随一の集客力」を誇るホテルには怪談じみた話もあり、夜間、「帰国者たちの耳に廊下を駆ける足音と叫び声が響いた」のは、収容所で囚人から選ばれた作業員である「かつてのカポや、密告された民兵団員、囚人に紛れ込んだスパイが、警察から逃れようと足掻いていた」（p. 196）からである。

ドイツからの帰還者には女性もいたが、ミゴの筆致は厳しい。

> 「S.T.O.［強制労働奉仕］の男性や、ドイツ兵を追ってドイツに行ったり、いい暮らしを約束してもらったりした女性たちは、たいてい頭が悪かったり娼婦だったりしたが、なんとか移送者で通そうと、ホテルの廊

下や食堂の立ち話で収容所の名と特徴をかき集めている。いざ自分たちが逮捕された状況を仔細に話す段になると、とたんにしどろもどろになる。本物の移送者でさえそうなのだが」(p. 196)。

ミゴの書き方には生還した女性に向けられる周囲の厳しいまなざし、つまり迫害者におもねって生き延びたに違いないという偏見も影響していたろう[37]。

ミゴが自分の無知なりバイアスなりに気づかされる場面は少なくない。男性からの聞き取りで、保護された土地の名から、ドーラの地下工場で働いたのか、と尋ねて間違い、別の地名を言われてハインケル工場かと尋ねて否定され、とうとうノイエンガンメに居たことならある、と聞き出せた。「ああ、分かりました」と答えたミゴに、彼は言った。「あんたは全然分かってない。俺は移送中に脱走したんだ。昼夜を問わず何日も歩きどおしで大回りして」(p. 212)。ミゴは自分たち受け入れ担当者が、「幻視者の世界で目の利かないよそ者で、彼ら自身が理解できずに耐え忍んだものを、理解しようとか理解したふりをしている。それが彼らの目に映る私たちなのだ」(p. 212) と落ち込まざるを得ない。それでも、「私たちが収容所からの移送、死体置き場、収容所解放について公表する総括資料のひとつひとつが、詳しい状況説明のきっかけとなり、記憶を目覚めさせ、見失った顔を思い出させる」と、聴取にそれなりの意義を見出す。その一方で、帰還者に「間違った確信を呼び起こす」(p. 212) こともある。

心理学でファンタスムとは、欲望が展開して充足できるような作り話、つまりフィクションを意味するが、元移送者と聴取者とが収容所経験を物語化して双方の気持ちを落ち着かせることもあったろう。強制移送の歴史叙述の担い手になるには、この幻想を打ち砕く必要がある。

(5) 証言の聞き手から歴史の書き手に

女性移送者について、ミゴは著書の末尾近くで次のような挿話を書きつける。

「ブーヘンヴァルトのある帰還者から労働部隊の資料、リスト、品目一覧をもらったところ、そこに女性の名が並んでいるのが気になった。
―― それはピー［pouff］の請求書でさあ。
―― 何よそれ。
―― まあその売春宿って言うか。ひとつあったんですよ、カポや、所内の顔役、うまいもん食ってる連中のためのが。
―― で、女たちは？
―― 被拘留者の女たちです。めったに志願者はいませんでしたが。
―― 彼女らはどうなったの？
―― そうポンポン私に尋ねられても。お分かりでしょう、収容所の話は誰にも聞かせられるものではないですよ」（pp. 303-304）。

ミゴも言及するダヴィッド・ルッセ[38]の言葉を借りれば「収容所宇宙」（p. 313）には深い闇があった。それでは、過去を隠そうとしない女性生還者に対して、どう振る舞えばよいのだろうか。たとえば、ミゴは戦後まもなくの1946年に絶滅収容所をいくつか視察して回ったときに、クラクフのレストラン〈ナポレオン〉で、ウエイトレスが半袖から出した腕に、元囚人の認識番号の入れ墨が残っていることに「胸を打たれた」（p. 307）と述べている。しかし、どのように「胸を打たれた」のかは、読者それぞれが思い描くほかない。女性の心の傷を思いやったのだろうか。それとも化粧のひとつと思ったのか。

『連合軍が収容所の扉を開いたとき』には、アウシュヴィッツの反乱やブーヘンヴァルトの解放の模様も、帰還者の著作をもとに史実を交えてドラマチックに書かれている。だが、本論で主として引いたのは、ミゴがやるせなさと憤懣を抑えながら回想する移送者探索と受け入れの現場である。そこに居合わせた生存者たちはレジスタンスの英雄ではない。典型的なのが年少者（チャイルドサバイバー）である[39]。とりわけ外国人の子どもは頭の痛い問題だった。

> 「さまざまな政治的・宗教的信条で色づけられた組織が子どもたちを奪い合っていた。ユーゴスラヴィアの子どもはミコライシク派とチトー派が要求し、ポーランド人ならアンデルスの一味と新生ポーランドが腕を引っ張る。それに自分の国籍を言いたがらない者、家族も祖国も自分の名もなくした天涯孤独の者もいた。彼らが持っているのは自分でこしらえたアイデンティティだけだったが、いったいどんな敵、どんな幽霊から逃れるためだったのだろうか」（p. 196）。

この他にも、リュッテシアホテル近辺にはフランス語を解さない外国人の子どもが「うろついていた」（p. 299）が、ミゴは子どもたちにアプリオリに純真さと無垢を認めて読者を感傷に誘ったりはしない。彼らが強制収容所システムの隙間に偶然入りこんで生還を果たしたからである。「子どもの魂を持った本当の子どもは、アウシュヴィッツのガス室がその命数を尽きさせた」（p. 299）。大人たちの手練手管を身につけた子どもが助かった。だから、「モーリス K. は人間的存在に戻るために、かつて自分が 15 歳の真面目な生徒で、収容所が彼の人生から父と母と兄弟を消し去ったことを忘れようとする

だろう」。「塵埃収集コマンド（作業班）のひどい悪臭と、もうどうなってもいいと倒れた雪の中で自分を襲った寒さを忘れようとするだろう。ドイツ人のカポが彼を生かそうと決め、彼は生きのびた」（p. 299）。モーリスはおそらくドイツ人政治犯から選ばれたカポに利用価値を認められ、見捨てられまいと臭気と厳寒をこらえて生きのびたのであろう。次の子どもはさらに凄惨な生を送ったようだ。

> 「ノエ・ヴィルネールもアウシュヴィッツを、懲罰部隊［Strafkompanie］を生きのび、ゲットーの瓦礫除去コマンドに耐え抜くだろう。死がぼくを望まないんだ、と彼は言う。ビルケナウでひとしきり責められ殴られた末、くたびれ切った死刑執行人が言い放ったものだ、この後も切り抜けられたら、お前は生きるように生まれついたってことだ、と」（pp. 299–300）。

ノエは死の代理人から呆れられ、ユダヤ人の蜂起後に破壊されたワルシャワゲットーを片付ける重労働に耐えて生存を果たした。受け入れ側の人間は、そんな彼らにかける言葉を持ってはいまい。そんな時、ミゴはただ聞くということのみをみずらに許したはずである。

移送者の追跡と受け入れ業務を終えたミゴは、「人間的存在に戻る」という意味でのナチ強制収容所からの「帰還」について書き続けた。『連合軍が収容所の扉を開いたとき』の随所に、強制収容所という人間性の臨界にあって、みずから人間として生き、他者が人間らしく生きられるよう手助けをした人々の名が記されている。たとえば、マウトハウゼン収容所周辺の過酷な軍需工場に労働力を供給するエーベンゼーというコマンドに配された人々の名を挙

げて、「これらの人々は力を振り絞って人間に留まろうと努め、他者が品位を保てるよう、持ちこたえるよう、タバコ一本と引き換えにスープを渡さないよう、自尊心を無くさないよう手助けした」（p. 233）と称えている。そして、「脱稿にあたって私は、本書に亡霊のようにとり憑くすべての人々、行方不明者と生者について考えている」（p. 312）と書く。このようにミゴは、過去を再現する歴史家というより、過去から教訓を汲み取る思想家に近づいている。

> 「人間と自分たち自身について、ある一定の観念を保つために戦ったこれらの人々は、必ずしも自分たちが生存するチャンスには恵まれなかったにせよ、他者の戦う意義を正当化するチャンスをより多く持てたろう。それゆえ、おそらく他者が生きる手助けをしたのではあるまいか」（pp. 312-313）。

人間としての存在を終始奪われた被拘留者は、まさに疎外という形で人間性について知る。ミゴの本の掉尾を飾る、母親を亡くしたS夫人とのやり取りが、その好例と言える。1944年6月のドランシー収容所を境に音信不通の母親が、当時65歳でも壮健だから移送中に脱走してはいないか、記憶喪失になって病院にいまいか、とS夫人は著者に問い合わせていた（p. 296）。20年後の1963年4月17日に再会したS夫人は、健忘症の母親がまだどこかをさまよっている気がするから、母がもう死んだと「名誉にかけて」自分に誓ってほしいと切望した。ミゴは名誉にかけて、あなたのお母さんは死亡していると断定した。物語が傷ついた人を安堵させると知るからである。

ナチ強制収容所生還者の「以前」と「以後」の生には断裂（hiatus）があり、それが本書の「素材」だと、ミゴは序論（p. 15）で述べた。移送者家族

にとっても記憶の断層の上にかろうじて建っているのが戦後の生である。S夫人は「安心して去っていった。あとどれくらい安心していられるのだろう」(p. 319)。物語の鎮痛効果が長く続かないと知るなら、そう思わざるをえまい。

結論

ナチスドイツ本国と占領地でなされた強制収容は歴史的事象である。それを個人的事象として経験した少数の生存者がおり、彼らの経験が言葉になるのを手助けした帰還者受け入れ担当者がいた。その中でオルガ・ヴォルムセル＝ミゴは、帰還者の経験を、歴史的事象として意義あるものと考え、これを証言してもらって記録し、報告書にまとめ、折に触れて周年行事のいくつかで公開し、本論で取り上げた書物にまとめた。同書にはミゴ自身の経験も回想され、帰還者の証言や歴史事象の専門的叙述と並べて書き込まれている。これは強制収容とホロコーストに関する歴史、証言、小説の3ジャンルを行き交う一人称の物語と言えよう。

個人的事象が優位にある現代では、自分の見ていないことは自分と関係がないと退けられがちである。読者、視聴者にとって過酷な歴史的事象の証言がすぐに許容の飽和点に達し、歴史が専門家の専有物となり、しかも歴史家の表現の自由が、為政者によって、出版社の経営事情によって制約されるとすれば、小説は経験が語り継がれるためにひとつの打開策になりうるだろう。

(本論文は平成23年度成城大学特別研究助成「文学的「家族の肖像」に見る幼年時代・思春期の歴史文化的研究」の成果公表の一部である。)

註

(1) Olga Wormser-Migot, *Le Retour des déportés Quand les Alliés ouvrirent les portes…*, Editions Complexe, Bruxelles, 1985.　同書からの引用は本文中に（p. 18）とページ数を記す。以後、著者をミゴと略称する。史料と著書目録では結婚前後でJungelson, Wormser, Wormser-Migotと表記されている。ミゴの事績は次を参照。Sylvie Lindeperg, Annette Wieviorka, *Univers concentrationnaire et génocide Voir, savoir, comprendre*, Mille et une nuit, 2008, pp. 11-39.

(2) 連合軍に同道してナチ強制収容所の解放と被拘留者の救出にあたった作家クロード・ロワを論じた拙論を参照されたい。有田英也「生の記述としての伝記と自伝――戦争と強制収容の20世紀を振り返る」『ヨーロッパ文化研究』31、2012年3月、pp. 73-96.

(3) 書籍の裏表紙に著者自薦文なり訳者解説なりから抜粋があれば、書店で本を手に取る潜在的読者の助けになる。たとえば、ルート・クリューガー『生きつづけるホロコーストの記憶を問う』鈴木仁子訳、みすず書房、1997年、には、「従来の〈ホロコーストもの〉とはスタイルを異にして、現在と過去を往還しながら書かれた」とある。「従来のホロコーストもの」について一定の知識を持つ読者が想定されている。

(4) Georges Perec, *W ou le souvenir d'enfance*, Denoël, 1975, p. 25.

(5) Edgar Morin, *Vidal*, Seuil, 1989. 「物語に息子として介入する際は、客観視するため三人称で」「父もできるだけ客観的に三人称で名指すことにする。」p. 7.

(6) Michèle Sarde, *Revenir du silence*, Julliard, 2016. 本書「エピローグ」で、母ジェニーの死去の3ヶ月後、祖父母の強制移送の詳細を知らせる英文のメールを受け取った作者は、最終ページをこう結ぶ。「新しい著作〈マリーを求めて〉がそこから生まれそうだ。乞うご期待。」p. 395.

(7) イヴァン・ジャブロンカの『私にはいなかった祖父母の歴史――ある調査』（田所光男訳、名古屋大学出版会、2018年）は歴史家によるジャンル横断の試みである。前述のモランとサルドは、実在する父母との語らいの記憶を通して、祖父母とその兄弟姉妹の事績にまで想像を巡らせた。同様に、ジャブロンカは「調査」という学問的、職業的手続きを介して、祖父母マテスとイデサの人生と、これと交差した人々の事績を描き出す。

(8) Jorge Semprun, *L'écriture ou la vie*, Gallimard, 1994, p. 23.　拙訳を用いた。右京頼三訳『ブーヘンヴァルトの日曜日』紀伊国屋書店、1995年。引用したのは、ドイツ

の敗北を予感する囚人たちが、帰国後に自分らの体験をどのように語ろうかと思案した挿話。ホルヘ・センプルンは、フランコ将軍のクーデター後、母国スペインからフランスに亡命し、第二次世界大戦中は抗独武装レジスタンスに加わった。逮捕されてワイマール近郊のブーヘンヴァルトに移送され、解放されるまでの 18 か月を生き延びた。共産主義者の赤い三角形を地にスペインを表す S の記章を帯びた彼は、被拘留者の労務派遣と他の収容所への移送を管轄する労働局（Arbeitsstatistik）に配属された。出身国別に編成された所内レジスタンス組織の幹部になった彼は、社会学者の政治犯モーリス・アルバックスの最期を見届けてもいる。

(9)　以下引用は Wormser-Migot, pp. 310–312.

(10)　Annette Wieviorka, *Déportation et génocide. Entre la mémoire et l'oubli*, Hachette, 2003, Pluriel, p. 49.　初版の発行年により以下、A. Wieviorka、1992 と略記。ただし、ミゴの記述は 1945 年 2 月に捕虜・移送者省からジュネーヴの国際赤十字本部に派遣された時のものであり、まさにこの時アウシュヴィッツからオデッサ経由でフランスに帰還した元拘留者が証言を始めたのだから、むしろミゴが「日々の発見」によって変わりつつある認識を書き留めたと考えられる。『連合軍が収容所の扉を開いたとき』の叙法を回想記と考えるか、それとも歴史叙述とするかで言葉遣いの不正確さの評価は異なる。

(11)　ハンナ・アーレント『新版　エルサレムのアイヒマン　悪の陳腐さについての報告』大久保和郎訳、みすず書房、2017 年。

(12)　ミゴは一部の強制収容所に設置されたガス室について被収容者と看守の証言を信用せず、マウトハウゼンのガス室に関する言明を「神話の類」と断じて、1969 年 6 月、マウトハウゼン帰還者友の会会長ピエール・セルジュ・シュモフから『ル・モンド』で抗議され、これを皮切りに全国レジスタンス移送者・収容者連盟から集中砲火を浴びた。Sylvie Lindeperg, Annette Wieviorka, 2008, pp. 36–38; Catherine Coquio, Aurélia Kalisky, *L'Enfant et le Génocide Témoignages sur l'enfance pendant la Shoah*, Robert Laffont, 2007, p. 1182. 註(13)に挙げるルッソも、ミゴの *le Système concentrationnaire nazi 1933–1944*, PUF, 1968 を「強制移送に関する最初の学術的綜合」としつつも「論議をかもさなかったわけではない」（p. 278）としている。今でも歴史修正主義サイトでミゴの著作が、ガス室の有無について学識者に異論がある、という文脈で言及されるのは痛ましい。

(13)　Henry Rousso, *Le syndrome de Vichy de 1944 à nos jours*, Seuil, 1987/1990.　ルッソによる画期は 1954 年、1971 年、1974 年だが、作品分析に関わるので本論はその詳

細に触れない。

（14） Robert O. Paxton, *La France de Vichy, 1940–1944*, Seuil, 1973, seconde édition 1997. 原題は *Vichy France Old Guard and New Order, 1940–1944* で 1972 年刊。『ヴィシー時代のフランス　対独協力と国民革命 1940－1944』渡辺和行、剣持久木訳、柏書房、2004 年。

（15） ユダヤ人コミュニティーにおける同胞の移送に対する学術的反応としては、アネット・ヴィーヴィオルカの主著の出版時にヴィーヴィオルカも編者のひとりとして協力した『パルデス』誌の「第二次世界大戦中のフランスのユダヤ人」特集号が挙げられる。目次にはその後、ユダヤ系フランス人および当時の外国籍ユダヤ人とヴィシー政権の関係について単著をなす研究者が目白押しである。移送については東方ユダヤ人の歌謡の分析が目を引く。1990 年代以降、しばしば『レクスプレス』『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌で「フランスのユダヤ人」特集が組まれるが、それは別の機会に紹介してみたい。*Pardès*, 16, Numéro spécial « Les Juifs de France dans la seconde guerre mondiale » sous la direction d'André Kaspi, Annie Kriegel, Annette Wieviorka, 1992, Cerf.

（16） A. Wieviorka, 1992, pp. 31–32, p. 39.　同省が改廃されるのは 1945 年 11 月 22 日で、共産党の反フレネキャンペーンのせいだったと言われる。A. Wieviorka, 1992, p. 101.　ヴィシー政権にもドイツに移送された戦時捕虜と労働者の管掌部局があった。帰還捕虜および捕虜家族総合委員会で 1944 年 2 月から解放まで占領ドイツ軍との交渉にあたったロベール・モローが、戦後にピエール・ラヴァルの娘と娘婿ルネ・ド・シャンブランの求めに応じて証言した。この証言は経済、外交、ユダヤ人問題、ラヴァルの事績と人柄などの証言とともに全 3 巻 1,800 ページ余の記録集に収まり、フーヴァー財団によって刊行された。ユダヤ人問題総合委員会の証言者グザヴィエ・ヴァラの場合、フレーヌ刑務所で書かれた文書から必要事項が抜き取られている。刑死したラヴァル元首相の名誉回復を目指す資料ではあるが、モローの証言の参照ページは下記。« Prisonniers rapatriés et familles de prisonniers » in Hoover Institute, *La vie de la France sous l'occupation 1940–1944*, Plon, 1957, tome 1, pp. 210–231.

（17） Sylvie Lindeperg, Annette Wieviorka, 2008, *op.cit*., p. 20.

（18） ナチ強制収容所帰還者の回想に見るユダヤ人被拘留者像は下記を参照。A. Wieviorka, 1992, pp. 236–263. 「ムーゼルマン」（ムスリム、回教徒）というまるで拝跪するかのように突っ伏して動かない疲労困憊の被拘留者を指す収容所の隠

語を、ミゴも使っているが、どのタイプの被収容者がそう呼ばれていたのかは記述していない。Wormser-Migot, p. 85, 207, 301.

(19)　Annette Wieviorka, *L'ère du témoin*, Plon, 1998, Hachette Littératures.

(20)　ヨアンナ・トカルスカ＝パキル「1946 年 7 月 4 日、キェルツェのポグロム――ユダヤ人大虐殺の第 4 段階？」加藤有子編『ホロコーストとヒロシマ　ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶』みすず書房、2021 年、pp. 91-133.

(21)　首相ラヴァルと警察長官ルネ・ブスケは、「最大限の人命を救った」というより、ユダヤ人を犠牲にして国益を守ろうとした。有田英也『政治的ロマン主義の運命　ドリュ・ラ・ロシェルとフランス・ファシズム』名古屋大学出版会、2003 年、pp. 372-373。オルフュス監督のドキュメンタリー映画『悲しみと憐憫』（1973 年劇場公開、1981 年テレビ放映）に登場したラヴァルの娘婿が、フランスのユダヤ人の命は他のナチ占領地より多く救われたと弁明し、インタビュアーから即座に反論されている。Marcel Ophuls, *Le chagrin et la pitié*, Alain Moreau, 1980, p. 163.

(22)　ラーヴェンスブリュック女子収容所の生存者のマリー＝クロード・ヴァイヤン＝クチュリエが証言。A. Wieviorka, 1992, p. 245.

(23)　「半ダースものタイピストが官報をつぶさに読んで、アーリア化された企業の果てしないリストを作成していた」。S. Lindeperg, A. Wieviorka, 2008, p. 18.

(24)　1990 年代のインタビュー（シモーヌ・ヴェイユ）と戦後すぐの評論や序文類（ロベール・アンテルム、ダヴィッド・ルッセ）に依拠した主張。A. Wieviorka, 1992, pp. 169-176. ミゴもアイヒマン裁判の前までを « le point de saturation » とする（p. 311）。

(25)　アーレント『エルサレムのアイヒマン』に触発された「現代的犯罪者」像を成立させるための編集だと言う。A. Wieviorka, 2008, p. 109.

(26)　Henry Rousso, *Vichy L'événement, la mémoire, l'histoire*, Gallimard, 1992, folio histoire, p. 701.　ルッソは第二次世界大戦終結 50 周年を機にヴィシー時代にまつわる論争的主題についてエリック・コナンと共著を発表し、その最終章で「中高教員は何をするのか？」と記憶の継承を問題提起している。Eric Conan, Henry Rousso, *Vichy Un passé qui ne passe pas*, Fayard, 1994.　また、ルッソにはナチ占領下のフランスに関する一般読者向けのムック本もある。*Les années noires Vivre sous l'Occupation*, 1992, Découvertes Gallimard, 156.

(27)　Charlotte Delbo, *Une connaissance inutile*, *Auschwitz et après II*, Minuit, 1970/2018, pp. 95-105.　ミゴはシャルロットが夫ジョルジュ・デュダックを追って南米で公演中

のアテネ劇団を去って帰国していたこと、1942 年に夫がモン・ヴァレリアンで銃殺されたことを巻末（p. 317）に記すに止めている。

（28） Dorine も Fanny も通り名で本名は Denise Mantoux（1912–1986）。逮捕・銃殺されたレジスタンス闘士の家族を救援したユダヤ系女性で、ミゴの頼もしい盟友になる。

（29） ガルニエは 1945 年にバチカン市国大使になった哲学者ジャック・マリタンの姪で、アンドレは、カトリックに改宗して司祭となるもユダヤ人として逮捕されドランシー収容所で没した詩人マックス・ジャコブのいとこ。ミゴの記述は 1945 年 5 月で終わるが、1945 年 10 月 7 日にアンリ・フレネの MPGD 省内に、短命に終わったものの「移送者と政治的・人種的理由による拘束者」委員会（commission « des déportés et internés politiques et raciaux »）が設置され、その事務局でミゴはアンドレ・ジャコブと報告書を執筆したが陽の目は見なかった（A. Wieviorka, 1992, pp. 424–425.）。ヴィーヴィオルカは、国家ぐるみの対独協力と、移送に果たしたヴィシー政府の役割を強調したからだと推測する（A. Wieviorka, 2008, p. 16.）。この幻の報告書についてはミゴも序論（p. 12）と巻末（p. 318）で、元フランス国立図書館館長でブーヘンヴァルト収容所帰還者のジュリアン・カーンが委員長を務めた、とだけ触れている。

（30） A. Wieviorka, 1992, p. 86; Rousso, 1990, p. 40.　引用文に続く、「少数の〈例外的な解放者〉に、人々は講演をさせるより沈黙を求めていた。それに彼らはたいして知らなかった」という一節は、ソ連軍より早くドイツ領内に攻め入ろうとする連合軍の戦略が、収容所の人命救助よりも優先されていたことを示すだろう。

（31） 『責め苦の庭』はオクターヴ・ミルボーのゴシック小説。被虐趣味によって誇張された収容所像だと本気にされなかった、とミゴは考えている。

（32） 連合軍の上陸を防ぐためにフランス西部海岸に築かれた陣地群。

（33） Paule Marcelle Elizabeth Bidault（1901–1976）は、レジスタンス団体コンバで Agnès と名乗った。1944 年 9 月から外務大臣、1949 年 6 月からは首相のジョルジュ・ビドーの妹。ドゴール将軍に任じられ、ヤンカ（ザビーヌ）・ズラタンとともにリュッテシアホテルで帰国移送者受け入れに従事した。

（34） A. Wieviorka, 1992, p. 86.

（35） Henri Michel, *Paris allemand*, Albin Michel, 1981, pp. 74–77.　防諜情報部はマジェスティックホテルが本拠のフランス軍政部（Militärbefehlshaber in Frankreich, MBF）と競合し、ヒムラー直属のクノッヘン（30 歳）は 1941 年 10 月のドロンクル一味

のシナゴーグ襲撃に爆薬を提供するなど率先してレジスタンス制圧とユダヤ人迫害に関わったため、オーベルクと交代させられた。Philippe Buren, *La France à l'heure allemande 1940–1944*, Seuil, 1995, pp. 95–97.　なお、ボニーとラフォンはパトリック・モディアノの小説『夜のロンド』（1969）でフランス人ゲシュタポ首魁のモデルである。

（36）　Jacques Delperrié de Bayac, *Histoire de la Milice 1981–1945*, Fayard, 1969.

（37）　男性より稀だったとはいえ、収容所に到着した女性に専門知識や職業経験があれば、アウシュヴィッツの農業試験場（ライスコ）のような好条件の労働に配置されたことは、まだ知られていなかった。アウシュヴィッツでライスコに配された政治犯シャルロット・デルボーは、女囚たちの中にスロヴァキア出身のユダヤ人女性で、親族のほとんどをガス室で殺害された Lily を見出した。Charlotte Delbo, *Une connaissance inutile*, pp. 67–68.

（38）　David Rousset, *L'Univers concentrationnaire*, Minuit, 1965.　初版は 1946 年。

（39）　澤田愛子はナチ強制収容生還者へのインタビューをまとめた本で、「イスラエルで一応コンセンサスが得られているサバイバーの範囲」に触れるとともに、収容当時に子どもだったチャイルドサバイバー3 人の証言を公にしている。澤田愛子『夜の記憶　日本人が聴いたホロコースト生還者の証言』創元社、2005 年。フランス語文献では「子どもとジェノサイド　ショアの期間における幼少年時代の回想」なる大部の研究書が、ナチスドイツに占領されたヨーロッパの全地域でチャイルドサバイバーとなった人々の証言を、第三者による聴取とエリー・ヴィーゼルやアーロン・アッペルフェルトらの自伝小説も加え、ポーランド語やチェコ語からはフランス語に翻訳して収録し、解説している。Catherine Coquio, Aurélia Kalisky, *op.cit.,* pp. xii-xcvi.